

ペテロの手紙第一5章10節 「キリスト者を強める祈り」

1A あらゆる恵みに満ちた神

1B 主の御名(ご性質)

2B 一方的な愛

3B 主による着飾り

2A 永遠の栄光への招き

1B 偉大なる王

2B 招かれた恵み

3A しばらくの苦しみ

1B 永遠との比較

2B 苦しみの終わり

4A 不動の者への祈り

1B 回復

2B 固定

3B 強化

4B 不動

本文

ペテロの手紙第一 5章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、今日で第一ペテロの最後になります。午後に5章を一節ずつ見ていきます。今朝は、5章10節に注目します。「**あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあって永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で回復させ、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。**」このペテロの言葉は、第一の手紙をすべてまとめた言葉になっています。そのテーマは、「キリスト者にとっての苦しみ」です。キリスト者の苦しみについて、二つの事が書いてあります。一つは、苦しみを耐えることができるのは、神の恵みがあるからです。もう一つは、苦しみを経ることで、信仰が堅くされるということです。

「苦しむ」ということは、私たち人類にとっての最も大きな課題です。苦しみから逃れるために、人々はあらゆる努力を惜しみませんでした。先日、二つの出来事がありました。

一つはニュースで、もう一つは電車の中です。電車の中で起こったことからお話しします。私の隣には歳を召した女性が座っていました。そのさらに隣には、大きな声でお話している女性でした。大きい声だったのでよく聞こえたのですが、病气持ちの方のようで、一度、キリスト教を試して、クリスチャンにもなったと言っていました。ところが、それでは合っていなかったのでやめた、という

ことも話していました。そして熱心に、隣の老齢の女性に、病や痛みに対する先祖供養を説いていたのです。先祖供養を怠ると、幸せが逃げていくというような考えです。

次にニュースですが、先月末、詩人で画家である星野富弘さんが、召天したことです。私たちの教会の仲間で、以前、群馬県にある富弘美術館を訪問したことがあります。彼は、中学の体育教師でしたが、クラブ活動の指導中に事故で頸髄を損傷して、手足の自由を失いました。しかし彼は、口に筆を加えて文や絵を描き始めます。そして洗礼を病室で受けています。彼の、花を中心とする詩画は、多くの人の心を揺さぶりました。海外でも、詩画展が開かれました。私が数々の彼の作品を美術館で見た時に思ったことは、「この人は手足が不自由になったから、私よりも自由にさせられた」です。何の変哲もない花について、私には見ることのできない小宇宙を見ることができるのです。それは、花を何時間でもじっと見つめることができるからです。

これはまさに、今、話しました、キリスト者としての苦しみの証しです。つまり、花にある神の恵みを彼は知っていました。次に、その苦しみを通して、信仰が純粹にされて、見えないものが見えるようになっていたのです。同じ病や不自由に対して、一方では、それは不幸なことであり、それを自分の頑張りを取り除くというものです。もう一方は、その苦しみに主の恵みの中にあり、その苦しみを主の恵みの中で受け取り、ますます心が練り清められるというものです。

1A あらゆる恵みに満ちた神

1B 主の御名(ご性質)

初めにペテロは、「**あらゆる恵みに満ちた神**」と言っています。恵みは、人の努力や功績とは全く別に、神が一方的に好意を抱いてくださっていることです。モーセが、主に「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」とお願いした時に、主は、ご自分の後姿を彼に見せました。そして、ご自分の名を宣言されます。「出 34:6-7【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み、恵みを千代まで保ち、咎と背きと罪を赦す。」これが、主の名前なのです。名前というのは、聖書では、その人の本質を表しています。その人格の中心を示しています。神の名というのは、神の本質、その中心がこのようなものなのだと宣言しているのです。その宣言が、「あわれみ深く、情け深い神。怒るのに遅く、恵みとまことに富み」ということなのです。

私たちが主が愛されるのは、私たちのほうに、何ら好かれる理由はないのです。神が憐れみ深いから、ただ一方的に良くしてくださるのです。これを恵みと呼びます。

2B 一方的な愛

それなので、私たちには好かれない、愛されない数多くの理由があろうとも、主が良くしてくださるのです。主がイスラエルを選ばれた時に、ただ慕ったからと言いました。「申 7:7-8【主】があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではな

い。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。しかし、【主】があなたがたを愛されたから、またあなたがたの父祖たちに誓った誓いを守られたから、【主】は力強い御手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王ファラオの手からあなたを贖い出されたのである。」イスラエルは、選ばれるのには数が少なく、魅力的ではないのです。それにもかかわらず、主は選ばれました。理由は、ただ、愛されたいからなのです。

パウロも、自分たちの知恵を誇っているコリントの人たちに対して、戒めるために、救われた時のことをこう話しています。「I コリ 1:26-27 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。」

この第一の手紙を書いているペテロ自身が、恵みを知った人ですね。彼は、イエス様を知らない、三度も断言した人物です。人々の前でこの方を否んだのです。イエス様は、人の前でわたしを認めない者は、父なる神の前でも、知らないと言いますと言われていました。このままだと、ペテロは、神の前に立てず、神から見捨てられてしまいます。しかし、主は豊かに赦されました。そして、なんと、教会の指導者として、天の御国の鍵を持っている者として立てられたのです。彼自身が失敗するのを知っておられました。しかし、「ルカ 22:32 あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言われていたのです。その兄弟たちへの力づけが、まさにこの手紙です。

3B 主による着飾り

神の恵みよって現れてくるものは、実に美しいです。神の恵みによって変えられた人々について、その人たちが行っている良いことには、その人たち自身が見えません。むしろ、その不完全な人々を用いている、完全な神の麗しさが際立っています。それは、その良い行いが、自分自身のものではなく、その良い行いさえも、神が用意しておられるんですね。「エペ 2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」

4B 必要な助け

そしてペテロが、「あらゆる恵み」と言っ、恵みが一つではなく、いろいろあって、そのいろいろな恵みのすべてに満ちておられると、神を紹介しています。これは、4章でも「神の様々な恵み(10節)」とあったように、具体的な場面において、神の恵みが現れるということです。例えば、ヘブル人への手紙の著者は、こう励ましています。「4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」折にかなった助けを得る時に、恵みが現れるんですね。

私は、先週、その恵みを見ました。あるクリスチャンの方の働きをお手伝いしているのですが、その働きに必要な、確かな情報や専門的な知識について、自分のお手伝いの範囲を超えていると感じていました。けれども、今、確かな情報が必要です。すると、その方とお会いしている時に、次の会合を予定している方々がいらっしゃいました。私はそのまま同席していました。すると、まさに、その確かな情報を、たくさんくれる仕事をしている方だったのです。折にかなった助けです。その方の置かれている立場や、能力では到底、できないことが、いつの間にかできるようになっているのです。主が共におられないとできないと、目の前で見せていただきました。

そして、このような恵みの現れがあるからこそ、私たちは苦しみに対して強くあることができます。パウロは、「キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。(1テモ2:1)」と言いました。

2A 永遠の栄光への招き

次に、「**あなたがたをキリストにあって永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身**」と言っています。

1B 偉大なる王

私たちは、神の恵みに触れると、その栄光を見ることができます。ペテロはこの手紙で、1章において、主がなされたすばらしい恵みを説き明かしましたが、「1:8b **ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。**」主のすばらしさとその栄光に満ちて、ことばに尽くせない喜びに満たされます。その栄光は、永遠の神の栄光なので、永遠に輝いているものなのです。

主は、王であられる方です。まず、人間の王の事を考えたいと思います。毎年、新年に天皇皇后陛下から、国民からの祝賀をお受けになる行事がありますね。みなぎ日の丸を振って、喜ぶのです。天皇陛下が国民の象徴として治めていることに対して、感謝し、喜び、祝福します。そして、私たちの神は、王たちの王であられる方であり、すべてを造られた創造主ご自身です。この方が、永遠の御座に着かれて、ご自分の望むままを行われています。

ですから、すべてを造られ、治めておられることについて、私たちは、それだけでも、そこにある恵みを知って、ひれ伏して、神をほめたたえます。「詩 99:1 **【主】は王である。国々の民は恐れおののけ。ケルビムの上に座しておられる方に。地よ震えよ。**」主が、自然においてあらゆる恵みを施してくださっています。

2B 招かれた恵み

しかし、それだけではありません。主は、ご自分の子として、ご自分のものを受け継がせる者として、私たちを選ばれたのです。天地を造られた方が、キリストにあって私たちを、その王族の中に入れてくださっているのです。「エペ 1:4-6 **すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方に**

あつて私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ決めておられました。それは、神がその愛する方にあつて私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。」これが、ペテロも第一の手紙の冒頭で語っていた選びです。

王族の中に招き入れられる選びは、恐れ多いことであり、恵み深いです。人間の世界で、とても重要な人々が集まるところに、相手の意向で自分自身が選ばれて、招かれたら、それは栄誉なことであり、驚くべきことです。私たちは、あらゆる自分の用事を横において、その招きに応じようと思います。それが、キリスト者が主の前に礼拝を献げることです。恐れ多いことなのです。ところが、イエス様は皮肉なことが起こることを語られましたね。王子の祝宴に、いろいろな人が、商売があるから云々といって、招きに応じませんでした。それで、王は怒って、道端にいる人々を片っ端から招いて、王子の祝宴の席を埋めたのです。大いなる神、王なる主の宴席に招待されているということは、大きな恵みであり、恐れ多いことなのだという思いを、回復させましょう。

3A しばらくの苦しみ

このようにしてペテロは、あらゆる恵みに満ちた神が、永遠の栄光に招いてくださっているということから、今の苦しみを見るようにさせています。「**しばらくの苦しみの後で**」と言っていますね。ペテロはこの手紙の中で、今の地上での生活は、寄留者や旅人のそれであることを強調しています。それで試練は、「**今しばらくの間(1:6)**」と言って、一時的であることに注意を引き寄せています。

1B 永遠との比較

使徒たちは、今の苦しみを、永遠の栄光と比べるように私たちに教えています。「ロマ 8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りない」と私は考えます。」取るに足りないと言っています。コリント第二では、「軽い」と言っています。「4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたすのです。」元々、「栄光」というのは、重さに関連する言葉です。太陽の質量が大きいので、光が集まります。そのようにして、栄誉や富、力などが集まって来るのが、栄光ということです。

なので、パウロがここで、「重い」「軽い」という比較をしています。私たちの受けている苦難は、一時的なものであり軽い。そして、後に来る栄光は永続して、重いのです。ところでパウロの受けている苦しみは、尋常なものではありません。言語に絶するものでした。第二コリント 11 章に、受けた苦しみを列挙しています。実は私が、トルコとギリシアに、使徒たちの足跡をたどる旅に行った時に、バスの中でコリント第一と第二のすべてを読みました。テサロニケやベレアのあるマケドニア地方から、アテネとコリントのアカイカまでは、長い距離でバスの移動時間が長かったからです。そして、団長さんが勧めていたので読み通したのです。自分の日本での生活や働きのことで、とても苦しい思いをしていました。けれども、パウロが自分の何十倍もする苦しみを通っているの

を知って、それでも愛を、聖徒たちに注いでいたのを知り、愕然としました。この何十分の一の苦しみであっても、精神的トラウマで、入院しないといけないのではないか？と思いました。

どうして、その苦しみを耐えることができたのか？その苦しみそのものに注目していないのです。その苦しみが重ければ重いほど、栄光の重さに比べているのです。どんなに苦しみが大きくとも、それをはるかに、天文学的に上回る、栄光の重さがあるのです。いつも天秤にかけるのです。苦しみが 100 キロの重石のように感じて、1 トンの栄光であれば無に等しいのです。そうです、このようにしなさいと使徒たちは教えているのです。神の恵みの栄光は、永遠で計り知れないものです。自分が苦しい時、主の御名を呼び求めます。そこに、慰めの御霊が臨んでくださり、キリストの栄光を見させてくださるのです。

2B 苦しみの終わり

そして、一時的だということを、パウロもペテロと同じように繰り返していますね。これは、試練は終わるのだということです。苦しみは終わりがあり、永遠の慰めがあるのだということです。イエス様は、悲しむ者は幸いであり、その人は慰められると言っています。「黙 21:4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

過越の祭の食事に、参加したことがあります。そこでは、マロールと呼ばれるものを食べます。ホースラディッシュという、要はわざびのように、鼻につく辛いものが入っています。知らずに、たくさん食べてしまいました。口の中が大変になりました。イスラエル人が奴隷の時に受けた苦しみを意味しています。けれども、ハロセットと呼ばれる食べ物があります。なつめやしのペーストを使っているのです。それを急いで食べました。すると、その辛さが、たちまち甘さの中で消えました。これはすごかったです。同じように、イスラエル人の受けた苦しみは、神によって、主のいつくしみの甘さに変わるのです。これが、私たちの受ける試練です。苦しみが苦しみに終わりません。主のいつくしみによって、辛さが慰めへとそのまま変えられるのです。

4A 不動の者への祈り

そして、苦しみによって、一人一人が整えられたものになります。「回復させ、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます」と言っています。これはまるで、自分自身が建物として喻えられています。壊れてしまっている自分が、その壊れている部分を修復されるだけでなく、しっかりと部分部分が補強され、土台もしっかりと据えられて、どんな地震や洪水でもびくともしないというイメージです。悪魔による大きな誘惑や試練があっても、それでも対抗できる力が与えられます。

1B 回復

「回復させ」と訳されているのは、「完全にする」とも訳されます。整えられると訳すこともできま

す。マタイ 4 章 21 節では、漁師であるヨハネとヤコブが、網を「繕っている」というところで、同じギリシア語が使われています。壊れているもの、破れているところが修繕されるという意味合いです。私たちに、キリストとの歩みの中で、いろいろな不足があります。けれども、苦しみを経ると、試練を経ると、その部分が取り扱われて、主が直して下さるのです。

2B 固定

次に、「**堅く立たせ**」とあります。これは、しっかりと補強して、強化するという意味です。何か、組み立て式の家具を購入して、自分で組み立てる時がありますね。まず、ねじをそれぞれに入れて、少し緩めにしめます。そしてすべて組み立てた後に、堅く締めます。その締める行為です。そうすれば、少し衝撃が来ても、耐久できます。8 節と 9 節で、悪魔が食い尽くそうとしているから、堅く信仰に立って、対抗しなさいと教えていますが、悪魔の攻撃にも対抗できるのです。

エゼキエルに対して、神は興味深いことを語られました。「3:8-9 見よ。わたしはあなたの顔を、彼らの顔に合わせて硬くし、あなたの額を、彼らの額に合わせて硬くする。わたしはあなたの額を、火打石よりも硬いダイヤモンドのようにする。彼らを恐れるな。彼らの顔におびえるな。彼らは反逆の家なのだから。」彼が、神のことばを語っても、「額が硬く、心が頑な」であると主は言われます。けれども、彼らの硬さに応じて、あなたの額を、火打石よりも硬い、ダイヤモンドのようにすると言われるのです。いわゆる、「面の皮が厚い」というやつです。図々しい、図太いということですね。「心臓に毛が生えている」とも言ってよいでしょうか。

3B 強化

そして、「**強く**」と言っています。これはそのままの意味です。強化するということです。忘れてはいけないのは、恵みによって強くされることです。ですから、私たちが弱い時に強いと言えます。「Ⅱコリ 12:9-10 しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

4B 不動

そして最後に、「**不動の者としてくださいます**」ということです。これが、土台を据えることです。どんな地震が来ても、洪水が来てもぶれることはない、ということです。

もう一度、星野富弘さんの証しを考えてみたいと思います。彼が、自分の頑張りで、あのような強さを持たったと思うのでしょうか？ 体育の教師が手足を動けなくされたのです。どれほど、辛いことか想像できません。それなのに、口を加えて文字を書くことに決めたのです。富弘美術館には、彼が初めて文字を書いた時ものが、掲げられています。まるで、みみずが張ったような文字です。どうして、あ

そこまで気が保てたのでしょうか？むしろ、喜びに満ちていました。苦しみを経たからです。神の恵みが、苦しみと共に働いたのです。彼自身が強くなったのではなく、その弱さの中でキリストの恵みが働いたのです。恵み深い主は、みなさんの中にも生きて、働いておられます。この祈りを、みなさんの祈りにしていきましょう。